

2021(令和3)年度

# 京都府NIE実践報告書



**Newspaper in Education**

(教育に新聞を)

京都府NIE推進協議会

# 目次

□ 発刊にあたって			
	京都府N I E推進協議会 会長	位藤紀美子	…… 1
1. 新聞を活用した情報活用能力の育成			
	京都市立竹の里小学校	北村 美香	…… 3
2. 新聞を生かし、知識と可能性を進化させ、効果的に社会に参加し、自己の目標に近づく子の育成			
～新聞の内容を理解し、利用し、熟考する読解力を育む～			
	京都市立羽束師小学校	内野 英教	…… 9
3. 新聞で広げ、つながる草内（くさじ）っ子			
	京田辺市立草内小学校	竹内 俊之	……14
4. 新聞記事を活用した主体的・対話的な学び			
	京都市立大淀中学校	高橋真理子	……19
5. 「自他の思いや考えを伝え聞く」～インプットからアウトプット～			
	京都市立花山中学校	岩崎 俊輔	……24
6. 新聞を読み比べる習慣、多面的・批判的な見方を養う実践			
	八幡市立男山東中学校	志村 五郎	……28
7. 新聞で培う「ことばの力」～豊かな表現力、読解力、対話力～			
	宮津市立栗田中学校	塩見 優真	……32
8. 「論理的な思考力」・「伝わる表現力」を育成するための新聞活用			
	京都府立久美浜高等学校・丹後緑風高等学校久美浜学舎	山下 豊子	……37
9. 「学びの深長」のツールとしての新聞②～多様性と寛容を求めて～			
	龍谷大学付属平安高等学校	佐々木じろう	……41
□これまでの実践校、準実践校、奨励校、トライアル校			……47

※報告書の所属・肩書きは、2021年度在籍校のものです。

発刊にあたって

## ご あ い さ つ

京都府 N I E 推進協議会

2021 年度会長 位藤 紀美子

2021 年度の実践報告書をお届けいたします。京都府の二十年余に及ぶ N I E 活動の推進に際しては、実践指定校の先生がたを中心に、京都府・京都市の両教育委員会や学校、各新聞社、日本 N I E 学会等の諸機関の多くのかたがたのご協力やご支援を賜ってきております。改めて厚く感謝を申し上げます。

2020 年 1 月早々に始まった新型コロナ禍は、その後も治まる気配はなく、ワクチン接種の回数より早く、ウイルスが次々と新たな変異株種となり、日常がもどりにくい日々が続いています。学校では、年間の方針や計画を立て実施しはじめても、中断せざるを得ないことも少なくなかったかと思います。そうした中で、N I E 指定校の 9 校（小学校 3 校、中学校 4 校、高等学校 2 校）からの「報告書」を頂くことができました。

N I E 実践の初年度の学校から 4 年目の学校まで、それぞれの児童・生徒の実態をふまえ、日常的に新聞に興味・関心を促しながら、教科や総合（探究）学習で、新聞記事の内容や書き方、また編集の仕方に着眼し、考え方や表現の仕方を学ばせています。その後、自分たちの問題意識や課題をもとに、協働で、自分たちの新聞づくり；（目的→）取材→編集→構成・執筆→仕上げ・発表（批評）を実施しているところも少なくありません。テーマは、毎日の出来事から、自分たちの生活する地域の特色、伝統や文化、さらに SDG s に関連づけたことまで、発達段階により、身近なことから視野が大きく広がっています。

不安定な日々の中で、これだけの成果をあげられたことに敬意を表し、心よりお礼を申し上げます。

「新聞作り」は、戦前より、生活文をもとに実践されてまいりました。日本独自の財産である「生活文」は、明治末期から大正・昭和にかけて、芦田恵之助が「課題作文」に対し「実事実想実感」を綴る「随意選題」を提唱して実践研究を重ね、全国にひろげていきました。続けて鈴木三重吉が、大正から昭和初期に、『赤い鳥』綴り方として、毎日の生活の中で、「自分のしたこと、見たこと、聞いたこと、（思ったこと、考えたこと）を、自分のことばで『ありのままに』書く」ことを唱道し、見事に「実写の価」を実現しました。その後半の『赤い鳥』綴り方から、生活綴り方が生成・展開し、結果、「綴り方」が生活（現実）認識の方法として認められることになりました。戦後も、「生活文」は、広く初等教育において、児童の生活記録として、児童と教師と家庭を繋ぎ、その児童の個性としてクラスや学校、地域で共有化されてきました。何より、その児童自身が、書いたことをもとに、対象を意識し、自分の見方や感じ方に気づき始めることが重要です。自己を内省し客観化する、いわゆる「第二の自己」が生まれ育つこととなります。アンネ・フランクが閉ざされた生活で、毎日自分宛の手紙（日記）を書くことにより、自己を支え成長していくのも、「第二の自己の形成」によるものが大きかったと考えます。

日本の「生活文」は、仮名文字を覚えれば、小学 1 年夏頃から絵とともに文章を綴ることができます。「ありのままに」書くことは、五感覚をもとに印象に残った事柄を時間軸でそのまま綴ることが基本です。その「印象」が基になり、時間をかけてその人ならではの見方や意見が醸成されていきます。鈴木三重吉は、「したこと見たこと聞いたことは、継時的展開」で容易だが、「思ったこと考えたことは、総合的展開」を要するため、書き慣れない児童には勧められない、と述べ、中学生や女学生の投稿作品にも、まず「直接体験」を実写することから始めるよう説いています。英国では、戦後（1944 年「教育令」以降）、日本とは異なる表現教育を展開しながら、「視点」や「観点」を用いて感覚を鋭敏にし、「印象」を大事にその人独自の「想」と「ことば表現」を耕し育てようとしています。（2018 年度報告書序文）

国や民族に関わりなく、人は 14 歳前後で思春期に入ります。少年少女（子ども）期から青年期へ移行する時期に、母語の土台・基礎ができます。その頃に、自己を内省し、客観化できる素地ができつつあるかどうかは大事です。そのための「体験とことば」がそれぞれの児童・生徒のなかで蓄積・醸成されているかです。

現在、生活面で、直接体験する場や機会は減少し、スマートフォン等でいきなり未知の人やことと交流する機会が急増し、学校でも様々な機器を活用することが増えています。社会でも教育でも IT 化が急速に進められ、論理的思考や表現が重視されている中で、児童・生徒それぞれの「自己形成」は要です。一人ひとりの児童・生徒がそれぞれの経験と学習をもとに、自分の意見を模索しながら、新聞等の活用で視野を拡充しつつ、読書等で「思索と熟考」を重ね、自らの資質・能力を伸ばして社会で活用できるようになってほしいと願っております。その一連の過程において、N I E 活動は、「社会における自己」を認識できる有効な方法だと考えます。

世界や日本の動向や気候の変動等で、毎日の情報が不可欠な生活になり、学校での N I E 活動はいっそう重要になってきております。学級や学年間、教科間、学校間、また地域や諸機関等との連携や協力もさらに必要になってくると思います。どうぞこれまで以上にご指導や、ご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

小学校 国語科・社会科・総合的な学習の時間・特別活動等

# 新聞を活用した情報活用能力の育成

京都市立竹の里小学校 教諭 北村美香

## 1. 実践の概要

本校は「自らを高め 共に生き 次代と未来を創造する子ども～やればできる！～」という学校目標を掲げ、研究主題を「質の高い《問い》を立て、粘り強く学び合う子どもの育成～コンパクトライティングによる学びの自覚化を目指して～」と設定して、取組を進めてきた。

N I E実践指定校3年目の令和2年度は、研究教科の国語科を中心に、総合的な学習の時間や社会科、特別活動とも関連付けて、はがき新聞作りや壁新聞作り、新聞を読んで考えを伝え合うコミュニケーションなどに取り組んだ。

令和3年度も研究教科の国語科を中心に、「情報活用能力の育成」のために、新聞を活用した取組を行ってきた。低学年では、文字や写真に注目し、分類や比較を通して様々な情報に触れる活動を取り入れるようにした。中学年や高学年では、教室前廊下にいつでも自由に新聞を閲覧できるコーナーを設置して、社会への関心を高めるとともに、新聞から得た情報から考えを深めたり、主体的な学びにつなげたりすることができるようにした。また、学習したことや経験したことをはがき新聞や壁新聞にまとめる活動を行い、国語科を中心に獲得した「ことば」を活用して表現することにも取り組んだ。限られた字数で表現する活動（コンパクトライティング）を通して、よりの確な「ことば」を吟味してつかう力を育成するとともに、子ども自身が自分の学びを自覚化し、さらなる学びにつなげていくことができるようにと考え、取組を進めてきた。

## 2. 新聞の置き場所と保管方法

どの学年の子どもたちもいつでも自由に閲覧し、新聞に親しむことができるよう、図書館前の廊下に新聞コーナーと新聞掲示板を設置した。新聞掲示板には、毎月の新聞記事の中から、N I E担当者が気になったニュースをスクラップし、コメントを付けて紹介するようにした。

また、高学年と中学年の教室前廊下にも、昨年同様、新聞コーナーを設置し、新聞をより身



近に感じられるようにした。継続した取組により新聞に親しむ子どもが増え、気になったニュースを、実際に新聞を広げて自分の目で確かめたり、学習と関連付けて、新聞から記事の書き方を学ぼうとしたりする子どもたちの姿が見られるようになった。



### 3. 実践の内容

#### (1) 新聞記事の紹介（図書委員会、放送委員会）

図書委員会の取組として、「おすすめの新新聞記事紹介」をした。図書委員の子ども一人一人が、みんなに読んでほしい新聞記事をスクラップし、記事の簡単な説明とその記事から自分が思ったことや考えたことを文章に書いた。紹介文は全校児童に読んでもらえるよう、掲示板に掲示した。

また、放送委員会では、毎週水曜日の給食時間に、お昼の放送のコーナーとして、放送委員会の子どもの気になった新聞記事を全校に紹介し、ニュースと共に、自分の考えを発信した。

これらの活動は、子どもたちがより新聞に親しみ、社会への関心を高めるきっかけとなった。

#### 【図書委員会】

わたしのおすすめ新聞記事は・・・



#### 【放送委員会】

わたしが気になったニュースは・・・

## (2) 読書まつり～いっしょに読もう新聞～

夏(7月)と秋(11月)の年2回の読書まつり(読書週間)に、お家の方と一緒に一つの新聞記事を読んで感想を交流し合う「いっしょに読もう新聞」の取組を、3年生以上で行った。今年で4年目となるこの取組は、一つの新聞記事から親子の会話が広がる、良い取組の一つとなっている。

お家の方の感想



子どもの感想

## (3) 新聞作り

N I E活動に取り組むにあたり年度当初に各学年で立てた年間計画をもとに、壁新聞作りやはがき新聞作りに取り組んだ。研究教科の国語科だけでなく、社会科や総合的な学習の時間で学んだことを中心に、学習のまとめとして新聞作りに取り組んだ。また、限られた文字数で書くコンパクトライティングの練習としても、はがき新聞作りを活用した。

4年生では、社会科「くらしと水」や「昔から続く京都府の祭り～祇園祭～」を学習して分かったことや考えたこと、「くらしとごみ」の学習で社会見学に行っ分かったことなどはがき新聞に書いた。学習したり見学したりしたことの中から、読み手に伝えたいことを選んで文に書き、挿絵や写真を添えて仕上げた。また、興味関心をひくような見出しを工夫し、読み手を意識した分かりやすい新聞を作ることができた。



5年生では、社会科「米作りのさかんな地域」の単元のまとめや社会見学の振り返りとしてはがき新聞作りに取り組んだ。庄内平野で米作りが盛んな理由を、限られたスペースで分かりやすく文章にまとめたり、日本で多く栽培されている米の品種をランキングで紹介したりしながら、学んだことをはがき新聞に書いていった。また、N I E記者派遣事業で来ていただいた新聞記者の方に、子どもたちが社会見学の振り返りとして取り組んだ新聞をもとに、読み手を引き付けるより良い見出しの付け方を教えてもらっ



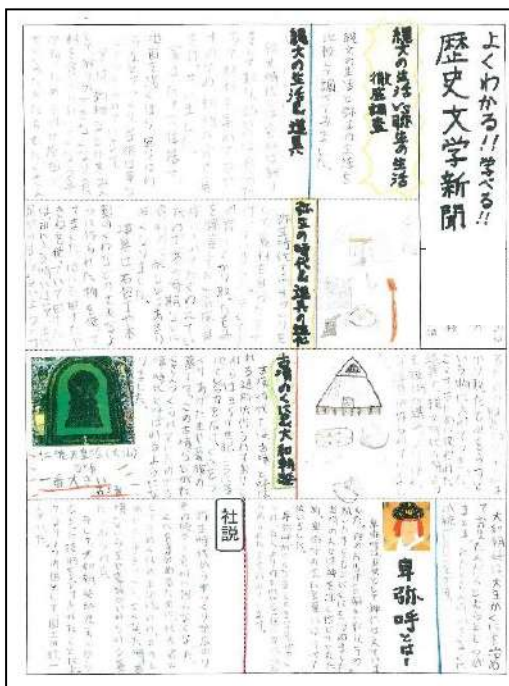
た。現場の新聞記者の仕事に直接触れることで、子どもたちは新聞をより身近に感じる事ができた。



6年生では、社会科「縄文のむらから古墳のくにへ」の単元のまとめで歴史新聞に取り組んだり、夏休みの出来事をはがき新聞で友だちに知らせたりする活動に取り組んだ。

歴史新聞には、縄文時代や弥生時代を学習して分かったことを二つの時代を比較しながらまとめたり、そこから考えたことを社説として文章に書いたりした。割付けや見出しを工夫したり、絵や写真を入れたりしながら、読み手を意識した新聞に仕上げることができた。また、学習のまとめとして取り組んだことで、学びの自覚化にもつながった。

夏休みの出来事を書いたはがき新聞は、クラス全員のを掲示板に掲示した。友だちの夏休みの様子を知ることができ、コミュニケーションの良い題材になると共に、児童同士の相互理解の手立てともなった。



【夏休みはがき新聞】





#### (4) 新聞ウイーク

9月と1月に「新聞ウイーク」の取組を行った。毎週1回、全児童に配布している「京都新聞ジュニアタイムズ」や新聞コーナーに置いている新聞を活用して、各学年、児童の実態に合わせた取組を行った。

あおぞら学級(育成学級)では、新聞の絵や写真の中から気になったものを選んでシールを貼り、友だちや指導者と交流する活動を行った。初めは絵や写真の見た目で選んでいた子どもたちが、「どんな絵かな。」「何の写真かな。」と考えをふくらませ、記事を読んで理解しようとする姿が見られた。



1年生では、新聞の中から好きな絵や写真を選んで友だちに話す活動をした。気に入った絵や写真を赤鉛筆で囲み、どうしてそれが気に入ったのかのわけとともに、友だちと紹介し合った。楽しみながら新聞に親しむ活動ができた。



3年生では、新聞記事に付けられた見出しを当てる活動を行った。「京都新聞ジュニアタイムズ」の中から指導者が選んだ記事にどんな見出しが付けられているか、まずは自分で考え、友達と交流したあと、実際の見出しを見て、見出しの良さや付け方のポイントを考えて。新聞記事の見出しを当てるというクイズ

的な活動に、子どもたちはキーワードとなる言葉を探しながら真剣に記事を読み、楽しそうに取り組んでいた。



4年生では、新聞記事の中から自分が気になったニュースを一つ選び、友だちと交流するという活動を行った。活動を通して、同じ新聞を読んでも一人一人気になったニュースが違ったり、同じニュースを選んでいても選んだ理由が違っていたりと、友だちとの共通点や相違点に気付くことができた。



#### 4. おわりに

N I E実践が4年目を迎え、ようやく全校、全教職員での取組が定着してきたように感じる。令和3年度は、研究教科である国語科の取組の中に「コンパクトライティングによる学びの自覚化」を掲げたこともあり、どの学年でも、はがき新聞や壁新聞作りに数多く取り組んでもらうことができた。また、年2回の「新聞ウイーク」を設けたことで、どの子どもも、必ず、新聞に触れる機会をもつことができた。

本校児童の課題として、「多くの言葉を知らない」といったことがある。今後も新聞を通してたくさんの言葉に触れ、少しずつ使える言葉を増やすとともに、社会に関心を持ち、様々な情報を活用しながら未来を切り拓いていけるような児童の育成を目指したいと考える。

小学校 国語科・社会科・総合的な学習の時間・帯時間

## 新聞を生かし、知識と可能性を進化させ、効果的に社会に参加し、自己の目標に近づく子の育成

～新聞の内容を理解し、利用し、熟考する読解力を育む～

京都市立羽束師小学校 教諭 内野英教

### 1. 実践の概要

本校は、本年度令和3年度よりNIE実践校となり、学校目標「なりたい自分に向かってなかまと学びしなやかにのびる子の育成」を根底に置き、研究を進めてきた。

1学期の主な取組としては、各学年、年間計画の作成、校舎内へ新聞コーナー新聞掲示板の設置、そして、5年生を中心に帯時間（ステップタイム）に新聞を活用した授業を週に1回実施した。また、5月に、新聞を活用した授業の工夫について実践代表者の本校教頭が校内研修を行い、全校でNIEの取組を進めていく足掛かりとした。

夏休み中に各学年の取組を集約し、9月の校内研修でそれぞれの学年が2学期の取組について具体的に何をしていくのか再確認し、意識づけをした。また、低学年も楽しく新聞が活用できるよう、実践者の教諭中心に研修会を実施した。11月の読書週間には、新聞に触れ合う機会を設け、その期間はより新聞に親しみやすくするようにした。

3学期には、全学年児童対象に新聞記事読み聞かせとして、教職員が今児童に知らせたい新聞記事をピックアップし、各教室にて読み聞かせをする活動を行った。

各学年の年間計画も新たに作成した。各学年概ね1学期に1単元、年間で3単元、重点的に取り組む活動を設定した。朝の学習や帯時間、国語科や社会科、学級活動、総合的な学習の時間を中心に、新聞を活用し、新聞に触れ合う時間を意図的に授業へ取り入れていった。「新聞記事紹介」「新聞をスクラップしよう」「クラスの係からみんなへ新聞で伝えよう」「日本文化を発信しよう」など、それぞれの学年あった単元構成で実践することができた。

### 2. 新聞の置き場所と保管方法

子どもたちがいつでも閲覧し、手にとって読むことができる場所として、校長室前に新聞コーナー（朝刊）を設置した。さらに、新聞コーナーの横に掲示板を設置し、3～4紙の新聞を読み比べたり、注目される記事を取り上げて掲示したりした。また、渡り廊下の角にも夕刊のコーナーを設置し、新聞の夕刊だけではなく、食べ物やスポーツなどの記事を紹介する掲示板を設置した。休み時間になると新聞を読んだり教室に新聞を持ち帰って読んだりする子どもたちの姿が見られた。

過去の新聞は、4～6年生の各クラスに随時配布し、教室での新聞学習に活用したり、子どもたちが興味をもった記事をいつでも読んだりすることができるようにした。



校長室前の新聞コーナー（朝刊）



夕刊コーナー



食べ物やスポーツの新聞コーナー

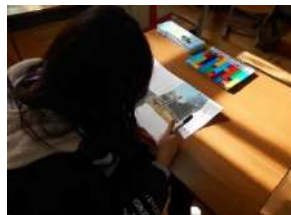


### 3. 実践の内容

#### ○育成学級の取組

総合的な学習の時間「わたしのまち」の学習で校区たんけんへ出かけ、お気に入りの場所を見つけた。お気に入りの場所を伝える新聞を作るため、その場所へ取材に出かけた。全体の写真と伝えたいものが大きく映るように写真を撮った。お気に入りの理由を記事に書き、新聞にまとめて発表した。

伝えたいものを写真に撮るようにしたことで、その場所にしかないものを確認することができ、また、新聞にお気に入りの理由を書く際の手立てになっていた。



#### ○1年生の取組

##### 1年国語「かたかなをみつけよう」

片仮名の学習が終わり、少しずつ片仮名を使うことが増えてきた。しかし、子どもたちが書く文には片仮名とひらがなが混じったものも多く見られた。片仮名で書くべきものもひらがなになっている実態があった。この単元では身の回りから片仮名で書く言葉を見つけて書いたり読んだりする言語活動を行った。

##### 〈成果と課題〉

- ・どの言葉を片仮名で書くのかわかっていない子どもたちに身の回りからたくさんの片仮名を自分で見つけ出すことは困難であるが、新聞から片仮名を見つけることはどの子にとっても見つけやすかった。
- ・新聞という一年生の子どもには新鮮な教材が学習意欲を高めた。
- ・一年生にとっては意味のわからない片仮名も多くあるので何かわからず、書き写す姿もみられた。
- ・新聞に触れる第一歩としてはとても有効的であった。



## ○2年生の取組

### <主な取り組み>

こども新聞を教室に毎朝置いておき、朝読書などの時間に読ませたり、朝の会で新聞記事を読みあげたりした。また、SDGsの意味について確認した後、17の開発目標と関連のある新聞記事を線で結んだ。

### <児童の変容>

- ・写真に興味を示し、新聞を手にする児童が多かった。
- ・朝の会で記事を読むと、関心をもつ児童が増えた。
- ・SDGsと関連する記事を探すのはまだまだ難しかったが、線で結ぶときには記事をじっくり読みながら線で結ぶことができた。



## ○3年生の取組

### <主な取組>

- ・社会科「商店のはたらき」

スーパーマーケットの工夫についてまとめるときに、新聞を参考に、どうすれば読み手が読みやすく見たいと思ってもらえるのかを考えた。新聞の特徴を知り、見出しを大きく見やすく書いたり、自分なりのキャラクターを作って読み手に一言書いたりした。



- ・デジタル新聞の活用

朝日小学生新聞のデジタル新聞を申込み、帯時間に読み気付いたことや思ったことを友達と交流した。初めのうちは特に記事を限定せず、自分の興味のあるものを中心に読む活動をしていたが、少しずつクラスで共有した記事を読み意見を交流することを増やした。



### <児童の変容>

普段はなかなか新聞を手を取ることが少ない児童も、GIGA 端末で新聞が読めることに興味を示しどんどん記事を読み進めることができた。世の中で起こっていることにも興味をもったり、ニュースでも聞いたことがあると話したりと自分の世界が広がっている児童が増えてきた。



### ○4年生の取組

- ・国語「新聞を作ろう」

新聞の特徴を知り、読み手に分かりやすい新聞を作った。

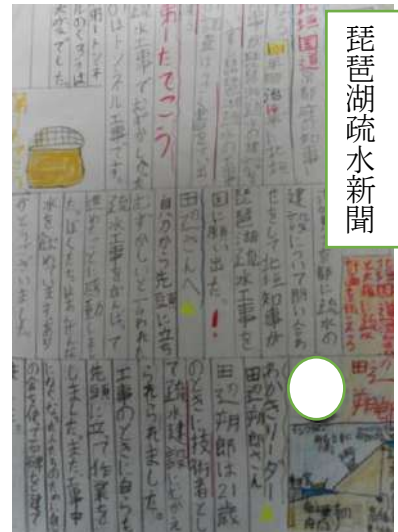
#### 【工夫した点】

見出し・わりつけ・写真や図などの利用

アンケートを取り、その結果をグラフにしてのせる事

- ・社会「琵琶湖疏水新聞」

国語科で学習した新聞作りを生かして、琵琶湖疏水について社会見学して実際に見たことや感じたことを中心に、取ってきた写真なども生かして新聞にまとめた。



### ○5年生の取組

司書教諭の資格をもつ教諭が授業を行い、新聞に親しみ、読むことに取り組んだ。国語科を中心に実践をすすめた。

5年生では、毎週一回新聞記事を読むNIEタイムを設けて、新聞記事にまつわるクイズや問題を解いた。国語科においては、「いろいろな新聞を読んで比べてみよう」という、めあてのもと、毎日新聞、京都新聞、読売新聞、朝日新聞、朝日小学生新聞の記事を読み比べた。同じ内容の記事でも、新聞社によって書き方が同じであったり、異なったりしていることに子どもたちは気づいていた。また、最後のふりかえりでは、「比べていくうちに新聞を読むことが楽しくなり、これからもいろいろな新聞を読んでいきたい。」と感想を書いた子どもが多かった。

毎週水曜日に更新される読売新聞の教育ネットワーク「ワークシート」を使用し、金曜日にNIEチャレンジと称して帯時間に実施した。

1学期には新聞の文章からキーワードに線を引き、視覚化する練習をした。

※引用原稿「2021年9月15日配信 読売新聞ワークシート通信」

2学期もワークシートで同様に取り組んだ後、ワークシートの内容に関係ある発展問題を担任が考え出題し、GIGA端末を使いロイロノートにまとめた。

#### <児童の変化>

初めのころは、文章の長さによって困惑していた児童も最近では必要なことを中心として読むことができおりワークシートを実施する時間がとても短くなった。また、キーワードを



見つけることによって自分の意見の中にキーワードを入れることができるようになっていた。国語の授業での要約など、よりわかりやすい文章が書けるようになった。

<下記ロイロノートでの実施した児童の提出物>

観音像の写真を添付	マスクは魔よけの意味を込めて鳥居と同じ朱色	Q 挑戦してみたいパラリンピックの種目
		ブラインドサッカー
		ブラインドサッカーの写真
		ブラインドサッカーの紹介を自分で考えて書いている。
Q マスク観音とは？		

#### ○6年生の取組

6年生では帯時間に新聞記事を要約した。まず、要約する時のポイントを指導した。敬体を常態に直すこと、重複していることは削ること、具体的なことは削ることなどを確認し、全400字程度の記事を200字程度に要約することに取り組んだ。

<児童の変化>

記事から必要な情報を取捨選択して要約することの難しさを実感した。児童からは、家の新聞記事を使って自主勉強で文章の要約に取り組みたいというつぶやきが見られた。



## 4. 成果と課題

### 【成果】

- ・これから新聞を読もうと思った児童が多かった。
- ・新聞の書き方にも注目している児童がいた。
- ・毎週のNIEの学習を通して、新聞を読むことが楽しいと思うようになった。
- ・新聞の読み方がわかったと書いていた児童もいた。
- ・NIE活動を通して、読解力やコミュニケーション力を高めることができた。

### 【課題】

- ・フリガナをつけても新聞の内容を理解することが難しい子もいる。
- ・一般紙より子ども新聞のほうが読みやすいという児童もいた。
- ・一般紙を家でとっていない家庭が多いようで、家でも新聞を読みたいと言っている子もいた。
- ・次年度は、全校で、新聞を活用した「伝え合い・まなび合い」の交流を実現したい。

小学校 全学年 国語・総合的な学習の時間

# 新聞で広げ、つながる草内(くさじ)っ子

京田辺市立草内小学校 教諭 竹内俊之

## 1. 実践の概要

本校は「互いに学び合い、高め合う草内っ子の育成」を学校目標に掲げ、研究主題を「新聞で広げ、つながる草内(くさじ)っ子」と設定し、NIE実践校としての1年目は全学年で様々な取組を行った。数年前までは、3年間の重点研究を「ココロつながる草内っ子」として道徳を、令和3年度はICTタブレットの導入に伴い「学びつながる草内っ子」として、1人ひとりの学びだけで終わるのではなく、思いや意見を友だちと交流することにこだわってきた。その交流こそが多面的・多様な考えに触れることになり、自分の考えが広がったり、深まったりし、深い学びになると考えた。そこで、実践校1年目としては、まず新聞のよさやおもしろさに触れ、社会のことを知るきっかけとなってほしいと考えた。

## 2. 実践の内容

(6年生)

### (1) 【総合的な学習の時間「なぞ解き研究」】(3回実施)

新聞記事を選んで、わからない言葉などを詳しく調べて、付せん書きこみ、その記事を深く読み、ペアで読み

合い、廊下掲示するというもの。「なぞ解き」をすることで、世の中のことを知ることはもちろん、聞いたことがあった言葉が知識としてつながる瞬間があった。また、ペアで互いに「なぞ解き」新聞記事を読むことで2倍、廊下掲示したものを読むことで数倍知識や興味が広がっていた。



### (2) 【社会】

衆議院選挙に向け、各党の公約の新聞記事を紹介し、学年で模擬選挙を行った。



### (3) 【社会】

ロシアのウクライナ侵攻の新聞記事を掲示し、自分の立場をシールで示せるようにした。



(4) 6年生廊下に毎日新聞2紙が閲覧できるようにN I Eコーナーを設置した。



(5) 修学旅行新聞（パソコン）や歴史新聞（手書き）を書き、読み合った。

（5年生）

(1) 【国語「新聞を読もう」】

地方紙と全国紙を比べて、同じ記事でも書かれていることに違いがあることに気づき、感想を書いてまとめた。

(2) 【国語「新聞なぞ解き研究」】

・気になる新聞記事から、疑問や分からない事を探して、自分で調べ学習をしてなぞときをしてまとめ、みんなで交流した。

(3) 【国語「提案しよう、言葉とわたしたち」】

・気になる新聞記事をきっかけに、周りの人に提案したい内容を考え、グラフや図などの資料を活用して、発表した。

(4) 【社会「情報社会に生きる私たち」】

・新聞にどんな情報が載っているのか、記者や編集の工夫や苦勞、新聞ができるまでを調べて、まとめた。

（4年生）

(1) 【国語「新聞を作ろう」】

・実際の新聞を読むことで、特徴や構成を学び、自分でも記事を書いた。クラスでアンケートを取ってクラス新聞を書くことで、よりみんなに伝えたいという意欲がわき、どのように書くと伝わるのかを新聞で確認することができた。

（3年生）

(1) 【国語「新聞を開いてみよう」】

「新聞に書かれている数字って何？」として、新聞の右上に、何かを表している数字が書かれていることを見つけさせる。番号が順番に並んでいることに気付かせる。数字の隣には、(経済)(スポーツ)(政治)など、内容について書かれているものがあることを教える。その後、これは1面に目次が書かれており、教科書等の目次と同じものであることを伝える。さらに、教師が伝えたページを開く練習をさせる。

(2) 『『の』の字探しゲームをしよう!』として、子どもたちに文字がたくさん書かれているページや目次を見ながら予想させ、開かせる。ひらがなの『の』の字を探し、○をする。

(3) 「写真から一言ゲームをしよう!」として、タブレットの写真機能やロイロノートアプリを使い、新聞に載っている写真(人が必ず写っているもの)を撮

り、ロイローノートの提出箱に提出する。他の人の写真を見ながらその人が何を言っているのか想像して書き、提出させる。

(2年生)

(1)【国語「お気に入りの写真を選ぼう」】

新聞の中から、自分の1番気に入った写真を選んで、選んだ理由やどんな記事の写真であるのかを添えて、ロイロノートで提出をさせ、みんなで共有を行った。

(1年生)

(1)【国語「数字を探そう」】

新聞の中から、数字を探し、丸をつけた。また、その中でも一番大きい数字は何だったか。大きい数字探しを班対抗で行い、見つけた数字をクラスで共有した。

(2)【国語「かたかなをさがそう」】

新聞の中から、かたかなを探し、丸をつけた。また、その中でも世界の国の名前をいくつ見つけられるか班で競い合い、見つけた国名をクラスで共有した。

(学校全体)

(3)各学年の掲示板に1～2週間ごとに、「N I E こんな記事が気になりました」のコーナーを作り、担任外や事務職員も含めて、新聞記事と全職員の感想や意見を書いたものを掲示した。

(N I E) 新聞で社会に目を向けて

月 日 ( ) 新聞

※必ず新聞の日付を書けよ!

※読めない字は記事に読み仮名をふってあげよう!

■記事に対してあなたの意見や感想を、次のうちどれかに書いて書いてください。

①発見(初めて知ったこと)は ( ) ②納得(やっぱりそうかと思っただこと)は ( )

③疑問(なぜかと思っただこと)は ( ) ④賞さん(すごい、すばらしいと思っただこと)は ( )

⑤驚き(びっくり)は ( )

名前 ( )



(図書室)

(1) 図書室にも新聞を読めるコーナーを作り、一面の紙面の意味を解説したものを貼っておいた。また、古い新聞も保管し、いろんな学年が使えるようにした。

## ■ 成果

(1) 子どもの変容

- ・特に6年生は、一面になるような最新のニュースに興味を持ち始め、休み時間や社会科でのつぶやきが変わっていった。ニュースについてより詳しくなったり、自分の考えを持つようになったりした。
- ・これまで聴いたことがある程度の断片的な知識が、謎解き学習をすることで知識としてつながっていった。
- ・新聞に興味がなかった児童が、興味を持ち始めた。分からない言葉をそのままにせず、調べることの楽しさを知った。
- ・友だちがどんな写真を選んでその記事がどんなニュースなのか知るのをおもしろがっていた。

(2) N I E について子どもの感想

- ・アフガニスタンがタリバン政権になり、女性の権利を尊重することをG20が要求したという記事→「アフガニスタンは最近テレビでよく見るけど、こんなに大変なのかと改めて怖さを感じました。この学習で世界のことを知れてよかったです。」(6年男児)
- ・宇治市で市民が復興させた「宇治田楽まつり」を踊るという記事→「ちょうど社会でその時代を習ったところだったので、すごく興味を持ちました。意外と近くに伝統があるなんて思わなかったです。」(6年女児)
- ・滋賀県の不登校の子どもが2209人過去最多という記事→「難しそうな単語が4つも出てきて、調べると意外に理解できて、なるほどと思いました。」(6年女児)
- ・「新聞は色々なことが書かれていて、これからも読んでみたい。」「新聞からいろんな記事を探すのが楽しい」という声もあった。
- ・学習をやり終わったときには、「先生、お家でも新聞見てみたよ！○○選手が載っていた！」と、記事が読めなくても新聞に載っている写真だけでも見る児童が増えた。
- ・「新聞を広げたことはなかったけど、新聞に自分の好きな選手が載っているうれしかった。」「新聞の数字の秘密が知れて良かった。」などという声もあった。

(3) 実践者の感想

- ・新聞の活用の仕方がいろいろとあることを知った。授業の中に新聞を活用し

てみようという意識を持つことができた。NIEの指定校にならなくても、新聞が毎日2紙ほど届くと、触れさせる機会が増えて良かった。

- ・興味を持った記事について、教師に内容の質問をしてきたり、自分で詳しく調べたりする児童がおり、興味の広がりや深まりを感じた。

- ・新聞は活字がたくさん書いてあるが、普段から目にすることで読むことへの抵抗は少なくなっているように感じる。

- ・友だちがどんな写真を選んで、その記事がどんなニュースなのか知るのを多くの児童がおもしろがっていた。

## ■課題

- ・子どもたちは新聞の漢字が読めないことが多かったので、常に教師の助言が必要だった。

- ・教師が選ぶ記事の掲示場所が教室に近いところにするべき(今は階段踊り場)だった。また、「気になる新聞記事」についての感想は、忙しい時期だと負担を感じた。

- ・掲示板の新聞記事と感想を高学年は関心を持って読んでいたが、中学年以下はあまり読んでいないようだったので、もっと朝の会などで教師が話題として取り上げて話をしてもよかった。

中学校 国語科1年生

# 新聞記事を活用した主体的・対話的な学び

京都市立大淀中学校 教諭 高橋 真理子

## 1. 実践の概要

本校は、令和2年度から受けた「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた実践研究事業」を研究の柱とし、「自主・自律の態度と共生の心を育成する」ことを、学校教育目標としている。令和2年度、NIEの実践に取り組んでいた3年生の教員が異動し、引き継ぐこととなったが、1年生の担当で、令和2年度の取組を継承することは困難であった。しかし、研究主題である「主体的・対話的で深い学びのある授業づくり～対話を深め、生徒が自ら意欲的に学ぶ授業を目指して～」に対応する「いっしょに読もう！ 新聞コンクール」を活用した授業実践を設定した。

事前のアンケートによると、新聞を購読している家庭の生徒は、1年生全体の36.8%であった。そのうち、毎日、複数のページを読んでいる生徒は9.1%、逆に全く新聞を読んでいない生徒は38.1%であった。新聞の「面」を知らない生徒も18.4%に上った。

まだ幼さの残る生徒にとって、「新聞を読む」という行為にはかなりのハードルがあると感じた。日常の会話を聞いていても、社会に目を向けたり、自ら情報を収集したりすることはなく、目の前に見える狭い世界だけで生活をしているようである。表現や語彙の乏しさからも、「新聞を読む」ことは、難易度が高いであろうことが予測された。

しかし、授業後のアンケートでは、およそ半数の生徒が「記事を捜したり選んだりするのがおもしろかった」と回答し、「記事について、友達や家族に意見を聞いてよかった」生徒が36.7%、「いろいろなニュースに興味をもてた」と感じた生徒が34.5%に上った。また、25.3%の生徒が、「新聞」自体に興味や関心をもつようになった」と回答した。

### <新聞6紙の閲覧コーナー設置>

学校図書館司書の協力を得て、図書室前に NIE コーナーを設けた。毎日6紙(朝日・読売・毎日・日経・京都・産経)を NIE コーナーに常時置き、新聞に目を触れるようにした。また、その日が過ぎた新聞は図書室内の新聞コーナーに移動させ、過去の新聞にも目を触れられるようにした。誰でも気軽に手に取れる場所に設置したことで、新聞を手にする生徒も増えたようである。



## 2. 実践の内容（6時間計画）

### 第1時 「情報の読み取り方や引用の仕方がわかる」

教科書（光村図書 国語1）の教材「情報を読み取ろう」「情報を引用しよう」「著作権について知ろう」を使って、グラフの種類とその特徴・資料からの読み取り・引用の仕方を学習し、ノートにまとめる。

小学校時や数学の授業で学んだグラフの特徴を改めて確認しながら、複数のグラフや文章の中の情報を関連付けながら読み解く練習をした。新聞を読んでいく上でも、今後の説明文の学習でも、事実を説明したり、筆者の意見を支える根拠としたりするための図・表・グラフに着目することが読解に役立つと実感できたと思われる。

また、今後、他教科の授業や総合的な学習の時間に、生徒自身が、レポートや報告書を作成する際にも、文章を裏付ける資料の活用と情報を収集する際に著作権に留意することなどを学習することは、意義がある。

### 第2時 「新聞紙面の構成を知る」

普段新聞を読むことがない生徒もいるので、改めて実際の新聞を使いながら、

見出しの作り方や、リード文の内容を、同日の複数の新聞社のトップ記事を比較しながら学習を進めた。

見出しやリード文を探すことからスタートし、それぞれの役割や効果について話し合った。同日のトップ記事が違うニュースであったり、同じニュースでも、見出しの作り方で、印象が大きく変わったりすることに新鮮な驚きを感じていた。

### 第3・4時 「興味のある新聞記事を探して読む」

図書室の大きなテーブルに、令和3年度の違う時期の新聞を複数準備し、グループごとに回覧し、フリートークの時間を取った。その中で、気になった記事をマーカーで囲み、最後は、それぞれに一つの記事を選択させ、切り取って応募用紙に添付させた。自由に選ばせたことによって、生徒の主体性を高め、新聞への興味付けにもつながった。一方で、自分の選んだ記事の部分だけを切り抜くことが困難な生徒も複数見受けられた。



生徒達は、複数の新聞を広げながら、記事や写真についての対話を、自然な形で始めていた。オリンピック・パラリンピックの開催、または開催までのニュースが多く、スポーツ関連の記事を選んだ生徒が多かった。選んだ記事は、漢字の読み方や知らない語句の意味を調べ、たくさんのニュースの中からその記事を選んだ理由をワークシートに記入することとした。

### 第5時 「記事を選んだ理由と記事を読んで思ったこと・考えたことを交流する」

グループごとに、それぞれが選んだ記事とその記事についてのコメント（選んだ理由と感想・考え）を読み合い、交流した。その後、記事を読んだ感想や意見を発表し合い、各自が友達の意見から聞き取ったことをメモした。また、家庭学習の課題として、家族にも記事を紹介し、コメントをもらうこととし、友達や家族から聞き取った意見をワークシートに記入させた。



## 第6時 「話し合った後の意見や提言をまとめる」

自分が選んだ記事についての友達や家族の意見の中から、自分との共通点や違い、自分では気づけなかった、違う角度からの記事の読み方をもとに、自分の考えを再考し、記事についての意見や提案を文章にまとめることとした。また、この新聞記事を使った学習を通して自分がつけることができた力をふりかえり、学習のまとめとした。

グループで1つの記事を囲んで、意見を交流中。



「どの記事にするの?」「どんなニュースあった?」「それ、いつの出来事?」



それぞれに新聞を広げ、興味のある記事を熟読中。



### 3. 成果と課題

新聞を活用した授業に取り組んだことで、新聞を身近なものに感じ、社会の動きに興味や関心を向けられたことは一定の効果があったように思われる。

コロナ禍が続く中、時期によっては、授業形態も制限され、対話形式をとれない期間も数ヶ月あり、今回のこの授業形態も実施できない状況であった。令和3年度から全面実施の新学習指導要領では、「本や新聞、インターネットなどから集めた情報を活用し、説明したり提案したりする活動」は、2年生の学習内容であるが、1年生の段階で、新聞を活用した授業に取り組んだことの意義は大きい。1つは、説明的な文章の学習の中で、「説明や記録などの文章を読み、理解したことや考えたことを報告したり文章にまとめたりする活動」を通して、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を養っていかねなければならないが、「新聞」という教材は、生徒が社会と関わる生きた教材として、有効であった。次に、たくさんの情報の中から、自ら記事を選択し、読んで考え、他者の意見に耳を傾ける今回の授業は、「主体的に学習に取り組む態度」を培っていく上でも有意義な学習活動であった。また、今後、社会の出来事に興味や関心をもつきっかけとして、自ら手にとって「新聞を読む」ことの意味は大きい。

次年度の課題としては、2年生の学習内容に取り組む際に、今回の学習で身につけたことを発展させること・継続して新聞を読む習慣を身に付けるような取り組みを行っていくことである。また、令和3年度は、1年生の国語でのみ「新聞を活用する」授業を実施したが、次年度以降は、身近な教材として、教科横断的に新聞を活用した授業を実践していきたい。

# 「自他の思いや考えを伝え聞く」

～インプットからアウトプット～

京都市立花山中学校 教諭 岩崎俊輔

## 1. 実践の概要

本校は、「志を高く、多様な学びを通して 持続可能な社会の担い手を育成する」ことを、学校教育目標としている。そして、研究主題を「自他の思いや考えを伝え聞く」～インプットからアウトプット～とし、様々な教育活動に「新聞」というメディアを活用した授業実践を設定した。

持続可能な社会の担い手の育成や実現に向けて何が必要であるのか？

「これからの新しい時代と社会は、将来の変化を予測することが困難な時代であり、今後20年程度で半数近くの仕事が自動化され子どもの65%は将来、今は存在していない職業に就く」と言われている。新しい時代を生きる子どもたちに、花山中学校は「何」を準備しなければならないのか？私たち教職員は、これからの社会に求められる人材育成や一人一人の子どもたちの思いや願いの実現に向け、次代に必要とされる資質・能力の育成に努めなければならないと感じている。

そして、本校生徒の課題でもあり求める資質・能力とは何か？企業等が求めている人材とは何か？そこには、インプットからアウトプットができ、それを活用できる力。その基となるのがコミュニケーション能力である。

そこで、必要とされる能力を身に着ける取り組みの一つに「新聞」というメディアを通して行うこととした。

そこで、全学年生徒へ「家庭における新聞購読数」についてアンケートを実施したところ338名中130名が購読していると答えた。割合では、38%である。学年にもよるが、全体的に見て新聞離れがわかる。インターネット社会の急速な発展による情報取得方法の変化の表れであるのは確実である。活字を通して言語能力や課題解決能力を身に付け、さらに、コミュニケーション能力を高める取組を行うことが重要であると考えます。

## 2. 実践の内容

### (1) 年間通しての新聞活用

常に、新聞が身近な場所にあり、年間を通して自由に読むことができるよう6紙(朝日・読売・毎日・日経・京都・産経)を毎月3紙に振分け、年間各紙4回とした。

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
朝日	○		○			○			○			4
毎日	○		○			○			○			4
読売		○			○		○			○		4
日経	○		○			○			○			4
産経		○			○		○			○		4
京都		○			○		○			○		4

## (2) 6紙の閲覧コーナー複数場所の設置と活用方法

新聞購読率が少ない現状から、新聞へ興味を持ち、読みたいという意欲を持たせることが重要であると考えた。そこで、生徒や教職員が閲覧しやすい場所を考え、職員室横と図書室へNIEコーナーを常置できるよう設置した。

原則、常に最新情報が得られるよう当日の新聞を職員室前とし教員、生徒が目に触れられ、教員が授業等で活用できるようにした。また、その日が過ぎた新聞活用においては、図書室内の新聞コーナーへ移動させ、過去の新聞にも目をつけられるようにした。

各授業で記事を活用する場合、当日記事については、掲載面をコピーし、活用する。過去の記事についても原則、当日記事と同じ扱いとするが1週間を過ぎた記事については、切抜き可とし、教材や教室、廊下の掲示物として活用しても良いこととした。





### (3) 朝学習「NIE Time」

毎週、金曜日を「NIE Time」の日と位置づけ記事の内容の収集と分析、相互の意見交換を隔週で行う。

#### 【インプット】

学年ごと時間内に記事を読み感想まで終える内容を A4 紙の学習プリントを作成し、成果物としてファイルへ綴じる。



#### 【アウトプット】

次週に自分でまとめた内容を次週に意見交換を行う。





#### (4) 国語科授業における活用

令和3年度は、国語科に焦点を当て単元内容等で記事を活用し、より深い学びにつながるよう取り組んだ。

例として、3年国語「報道文を比較して読もう」という単元で、同様な記事内容を他社と比べて読み、気づいたことや考えたことを文章にし、意見交流を行った。

各社、記事の真相の捉え方や考え、視点の違いに気づくことができたようであった。



### 3. 成果と課題

年度当初、購読に関するアンケート実施した結果、非常に家庭での新聞購読率が低い実態を把握することができた。時代の流れや、インターネット社会の急速な発展等から考えた場合、理解せざるを得ない状況であるかと考えてしまう状況であった。しかしながら、教育において、何を大事にしなければならないかと考えた時、「不易と流行」を忘れる事はできないと感じた。先人たちが大事にしてきた教育の基本、「読み」「書き」「そろばん」。そのひとつである「読み」。本校生徒の課題であるコミュニケーション能力を高めるための方策の一つとして「読み」が重要であると考え「新聞」というメディアを通して行ってきた。

しかし、コロナ禍が続く中、時期によっては、授業形態等も制限され、対話形式をとれない期間も数ヶ月あり、自他の思いや考えを伝え聞くという時間確保が厳しい状況でもあった。そこで、新聞を幅広く様々な教育場面で活用するのではなく、活用場面を精選した。第一は朝学習「NIE Time」、第二に国語科授業における活用。この二時間に絞ったことで一つ一つの内容や意見交流の場で深まりのある学びにつながっていったと感じる。

また、自ら手にとって「新聞を読む」ことの意味は大きい。新聞を身近なものに感じ、自分の興味ある時事問題から社会の動きに興味や関心が向くようになったことでも一定の効果があったと思われる。

次年度は、さらに生徒会活動や専門委員会など、生徒活動を通じて社会と関わる生きた教材として、より効果的に活用していきたいと考える。

## 新聞を読み比べる習慣、多面的・批判的な見方を養う実践

八幡市立男山東中学校 教諭 志村 五郎

### 1. 実践の概要

本校は、「自ら学び、心豊かで逞しく生きる生徒の育成」という学校教育目標のもと、目指す生徒像の「主体的に学び考え、生涯にわたって学ぶ意欲を持ち続ける生徒の育成」を図るため、NIE教育の活用を行った。「主体的に学び考え」るために、確かな学力を身につけ、主体的・対話的で深い学びの実現を、新聞による授業改善を手段の一つとした。

国語科、社会科で新聞の活用を行う前に行った事前の生徒アンケートでは、新聞を購読している家庭が約3分の1程度であったため、多くの生徒が新聞を気軽に目にすることができるような環境面の整備を行った。コロナ禍のため、新聞を誰もが触ることができる状況に戸惑いはあったようだが、年間を通して新聞の1面を見ることができるよう設置し、さっと目にする生徒、見出しを他社と見比べる生徒などが少しずつ増加してきた。発行元の違いによって新聞の見出し、捉え方が違うことを普段から目にすることで、主体的に学び・考える一助とした。

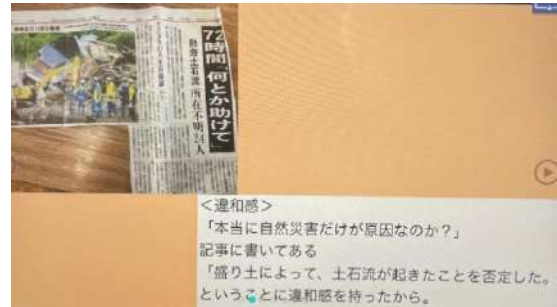
### 2. 実践の内容

#### (1) 国語科の実践

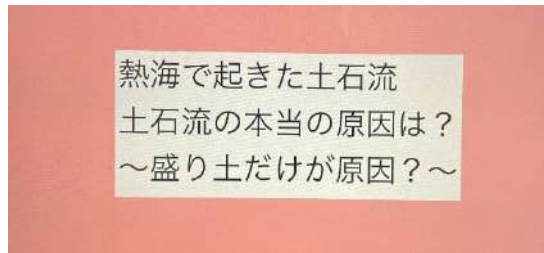
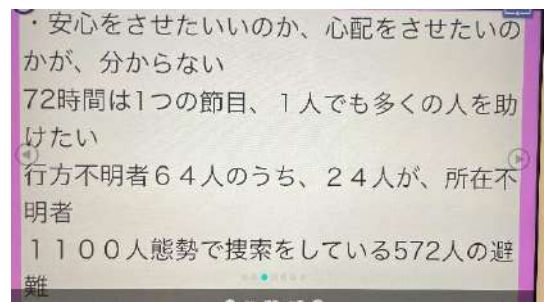
1年生での「ニュースの見方を考えよう」の単元後に新聞を活用して、多面的・批判的に読む活動を取り入れた。この単元では、「ニュースを比べてニュースの見方について自分の考えを持つ」、という学習目標で授業展開をした。著名人である池上彰氏の分かりやすい文章であり、メディアリテラシー教育としても興味を持ちやすい内容である。授業前にアンケートを取ったところ、本校一年生は普段からニュース（新聞・テレビ・インターネットなどの）を見ている生徒が多くいることが分かった。そのほとんどが情報収集の手段として活用している背景であった。しかし、この単元終了後の振り返りでは、「その情報が正しいかどうかを吟味してみる必要があると感じた」「それぞれの視点に立って、ニュースを見ると、こんなにも印象が変わるんだと感じた」「今までニュースを何気なくみていたけど、事実なのか考えなのか、自分がしっかりと見極める必要があると思った」といった内容がほとんどであり、自分のニュースの見方について考え直している様子がうかがえた。この単元終了後に取り組んだのが以下の内容である。

新聞活用の取り組みについて

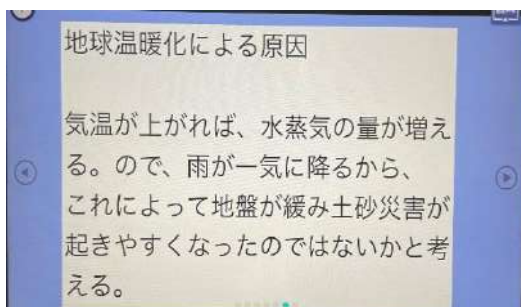
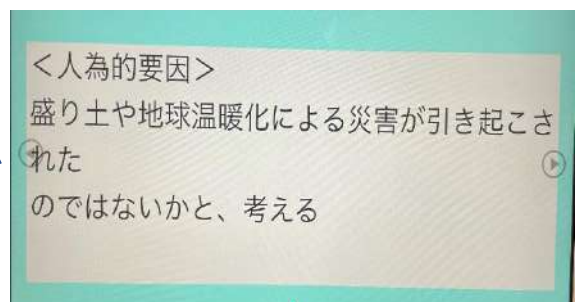
- ①新聞記事から違和感（どうして、本当など）を持つものを探す。  
（個人で考え、グループ交流をして、1つに絞る）



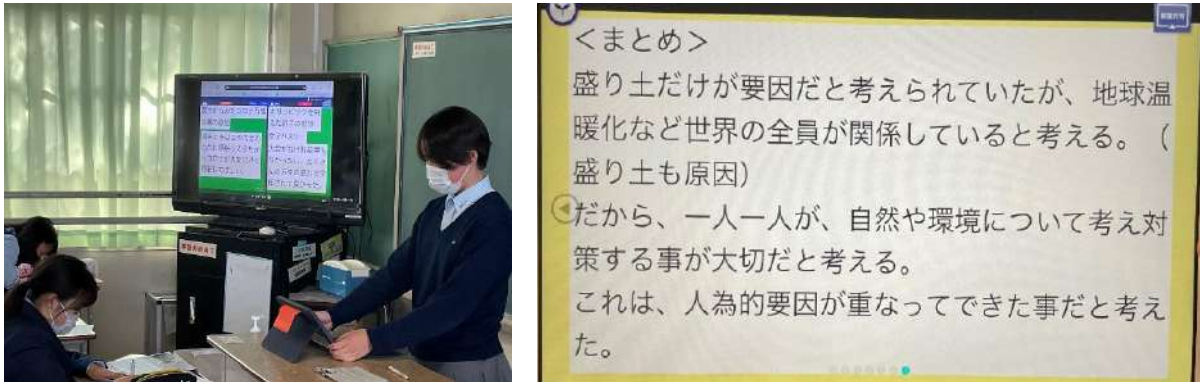
- ②グループ交流より、多面的な見方、批判的な見方についてグループ交流を行う。



- ③出てきた見方についてグループ内で分担し調べる。そこから違和感についての最適解を考える。



#### ④各グループによる発表と、クラス内での交流。



### 成果と課題

多面的・批判的な見方というテーマで学習を進めてきて、新聞記事だけに留まらず、様々なことにこの見方を取り入れられていることが見られるようになった。あらゆる情報が飛び交う現代において、非常に大事な学習になったのではないかと考えられる。今回は記事だけに目を向けさせたが、今後は映像や写真、図表なども含めて考えさせることを取り入れていきたい。

### (2) 社会科の実践

内容について

#### ①授業初めの1分間スピーチ

毎回の授業において、気になる新聞の内容を1分間でスピーチする。その後教科担当からその話題を取り巻く周辺の状況の解説や、ほかの生徒に意見を聞き、内容を深めていった。

#### ②記事の内容から、自分の意見をまとめる

授業に関係のある内容が記事として出ていた場合、教科書の内容・各社の報道内容を読み比べさせ、意見を書き、その後生徒同士の内容交流をさせた。

#### ③定期テストにおいて、時事問題を出題

授業での実践をもとに、時事問題を出題することで知識の定着を図り、社会科が現在の社会情勢を読み解く1つの手段であることを意識させた。

### 成果と課題

#### ①について

記事の内容を読み比べることで、論調の違いに気づき、理解がより深まっていた。生徒によっては2誌を比べてその違いをスピーチしていた。その生徒は新聞記事の内容、学校のiPad(GIGAスクール構想)で内容をさらに調べ、自分なりの意見を添えていた。また、新聞を一定期間並べていたため、一週間という時間の経過とともに変化する記事の内容を捉える生徒もおり、スピーチの内容がそのときの点の情報のみを話すのではなく、情報が変化して行く中でその事象



を線としてとらえることができている。今回は授業初めの1分間という設定を通常で通したため、スピーチの回数が少なく、発表の仕方や内容の変化があまりみられない生徒もいた。次年度については他教科との連携を図り、発表の仕方などを改善していきたい。

## ②について

教科書の内容をもとに新聞記事の内容と比べ、自分の意見を書くことで、さまざまな疑問が生徒の中で生まれていた。それらを生徒同士で交流し、理解が深まることで、さらなる学習意欲につながった。三年生でこの実践を行ったため、公民の内容とつながる新聞記事も多く、つながる内容はないかと新聞をめくっていく生徒もおり、授業内容の理解も深まっていった。

## ③について

定期テストに出題をするということで、生徒は様々な情報媒体を使っていたが、毎日、新聞をさっと広げていた。テスト前には一面がすべてみえるかたちで十日分程度の新聞を置き、見比べていた。これらの生徒はメモをとることも増え、情報の精査を新聞・iPad・テレビなどを使っていた。



## 3. まとめ

iPad (GIGA スクール構想) を用いて授業実践を行っていく中で、新聞という媒体で実践をしていくと、やはり新聞の取り扱いやすさや、学びの多様性を感じることが多かった。生徒の感想の中で「新聞を開いたときに見ようとしていた情報以外に、勝手に目に入ってきた記事が意外とおもしろかった」というのがあった。新聞を使うことで、これについて情報を得よう、学んでいこうと思っているもの以外にも興味関心が出てきて、主体的に学ぶ意欲が出てきたように思える。アプリなどで手にする情報は、興味があるものしか開かない、または本人の好みによって表示されるニュースが変化するような環境の中で、思ってもみなかった情報(生徒にとって)が飛び込んでくるのはおもしろいに違いない。本校には朝読書の習慣があるが、少しずつ朝新聞の習慣がついた生徒もいた。電子媒体が主流になりつつある中で、やはり手に取る新聞の良さを生徒が感じてくれたように思う。今後は、その習慣をさらに教科の内容などに結び付け、実践していきたい。

中学校 全学年 国語・社会・総合的な学習の時間・特別活動等

# 新聞で培う「ことばの力」

～豊かな表現力、読解力、対話力～

宮津市立栗田中学校 教諭 塩 見 優 真

## 1. 本校の実態

本校では、「未来を生きる心身ともにたくましい生徒の育成」を教育目標とし、「主体性・挑戦意欲の高まる指導の研究」を令和3・4年度の研究テーマとして掲げて、教育活動を進めている。

生徒は、豊かな自然の中で、伸び伸び過ごし、学校行事や様々な活動においても意欲的に取り組むことができている。

しかし、少人数での生活が続くため、人間関係があまり変わらず、多様な考えが出にくい実態がある。さらに、世間で起きていることに対して、関心が持てず、視野が広がりにくい状況で過ごしている面も見られる。

### 目的

- ・日常生活や学習の中で、生徒の「ことばの力」の育成を図る。
- ・社会に対するものの見方を広げたり、記事（意見）に対する自分の考えを述べさせたりする力（表現力）の育成をめざす。
- ・考えを深めさせるとともに、お互いを認め合い、主体的に情報を発信する力の育成を図る。

## 2. 新聞の置き場所と整理方法

購読が始まった9月から年度終わりまでの間、各学年フロアにNIEコーナーを設け、廊下で手軽に新聞を手にすることができる環境を整えた。

当初は、一部の人が目を通すという程度であり、生徒が積極的に関わるコーナーとは言えなかった。

しかし、新聞を活用した授業や委員会の取組、課題が与えられるようになる中で、コーナーに関わる子どもが増えてきている。





新聞の保管場所については、本校の図書館教育担当と連携し、図書室を保管する場所として設定し、図書委員会とともに整理をしている。

### 3. 実践の内容

#### (1) 新聞づくり

社会科では「身近な地域の歴史」の単元で、地域の歴史新聞づくりを行った。身近な地域の歴史に着目して、地域に残る史跡や、受け継がれてきた伝統・文化などを調べた。生徒自身が設定したテーマについて調べ考えたことを、限られた紙面の中で、いかに分かりやすく表現し伝えられるか、試行錯誤しながらも新聞の構成・特徴を捉えて意欲的に取り組むことができた。



#### 1 調査計画を立てよう

《作業の流れ》				
①テーマの決定	②情報の収集 調査	④情報の整理	⑤新聞レイアウト づくり	⑥清書 →完成
①《テーマ決定・調査の計画を立てる》				
テーマ				
設定理由				
探究計画				
知りたいこと		調べる方法(手段・いつ・どこで)		

#### 2 情報の収集 … テーマに基づいて、調査しよう。

調べたこと、著書など、書いていこう。

- ・複数の資料を比較しよう。複数の資料を関連付けて考えよう。
- ・収集した資料に、自分で、考えたことやわからなかったことなどのコメントをつけよう。





表



裏

#### 4. 成果と課題

##### (1) 成果

各学年ともに、教科等の学習や学級での取組に新聞記事を教材・素材として取り入れたことで、身近な社会や世の中の出来事に関心をもつようになってきた。

また、新聞を用いて「今」の出来事などを取り上げて知らせたり、論評したりすることを通して、生徒たちと社会生活を直結させ、学習への意欲を引き出すことができた。

そして、教師側が資料としての新聞活用を意識することで、単なる知識にとどまらず、社会との関連の中で子どもたちの思考を広げる指導の工夫を心掛けるようになり、教材研究の幅が広がった。

##### (2) 課題

授業の中で活用する際、教科書、資料集、新聞記事と多くの情報をもとに調べることになる。資料が多くあることで、選択できず、負担に感じてしまう生徒もいた。新聞記事を含め、資料を精選する必要がある。

また、新聞を読んで問題に気付いたり、もっと調べたいという意欲を持った姿があまり見られなかった。活動の内容に、教師側の工夫が必要であったことと、何のためにやっているのかを子どもたちに丁寧に伝える必要があると感じられる。

今後、新聞が伝える情報の特徴を理解し、自分の学習課題に沿って資料収集ができる力や、新聞記事の文章構成やリード文の書き方など文章表現力や活用する力を、学年の学習内容等に沿って伸ばしていきたい。

今、子どもたちは手軽にインターネットを利用できる環境にあり、実際に全国各地で SNS による子ども同士のトラブルも発生している。こうした時代だからこそ、新聞を活用した活動の中で「発信すること」の公共性や社会的な責任について自覚した表現者を育て、あるべき情報社会の姿を考えさせたい。

高等学校 国語科・地歴公民科・家庭科・農業科・福祉科

## 「論理的な思考力」・「伝わる表現力」を育成するための新聞活用

京都府立久美浜高等学校・丹後緑風高等学校久美浜学舎 教諭 山下 豊子

### 1. 実践の概要

本校は令和2年度まで国語科の学校設定科目として2年次の選択科目に「新聞講読」をおいていた。2～3紙のトップ記事の比較、興味を持った記事の要約・探究、コラムの読み比べ、投書欄への投稿など、週に1回ではあるが新聞紙を広げて様々な内容の記事に触れる機会となっていた。また他教科でも授業で学習した内容について、自分の意見を発信する場として新聞を活用してきた。

このような経過の中で、令和3年度NIE実践指定校に採用していただき、より多くの教科が新聞を活用して情報や考えを理解する活動や、聞き手に伝わるように発信する活動等に取り組み、学校の目標である「論理的な思考力」、「伝わる表現力」を育成するための実践を行った。

### 2. 新聞の置き場所と活用の仕方

実践指定校1年目で、新聞利用を該当教科以外の教員にも新聞が目に触れるように置き場所を印刷室とした。授業で使用するときは他の教科の使用と重なった場合を想定して切り抜きをせずにコピーを取って利用した。結果的には差し支えることはなかったようで、手間がかかることが課題として残った。置き場所・活用方法ともに考えていく必要がある。

### 3. 実践の内容

#### (1) 国語科（3年生選択科目 国語表現）

まわし読み新聞を行った。京都新聞・読売新聞・毎日新聞・日本経済新聞を読み、気になった記事の一つを選ぶ。選んだ記事と選んだ理由をグループで共有し、大きな模造紙に選んだ記事を配置に気をつけながら貼りつけ、ひとつの大きな新聞記事をつくった。

成果：普段あまり新聞を読まないと言っていた生徒が「面白い」と言って読んでいた。

また、新聞で自分の興味のある個展が開催されることを知った生徒が、書かれている記事を片手に自分が選んだ理由を熱弁していた。

課題：もともとは新聞づくりを通して、新聞の構成の仕方や情報の選択の幅を広げるといった目的だった。しかし、活動がメインになってしまい、肝心の内容まで達成できなかった。また、新聞記事を切り取れないため、生徒が選んだ記事をコピーしなけ



ればならず、時間の大きなロスになった。

## **(2) 地歴公民科 (3年生選択科目 政治・経済 1年生 現代社会)**

- ・授業の中で適宜、新聞記事の中からニュースを取り上げ、紹介した。
- ・定期考査に時事問題を取り上げ出題した。

(以上、政治・経済、現代社会)

・週に一度、ニュースや新聞記事の中で生徒それぞれが興味・関心のあるものを1つ取り上げ、それに対する自身の意見をまとめ、わからない単語について調べるといった課題を課した。

(現代社会)

成果：18歳で選挙権を持つ上での、政治・経済に関心を持つことへの一助となった。

課題：メディアによる報道の視点の違いまでは考察が届かなかった。

## **(3) 家庭科 (1・2年生 家庭基礎)**

- ① 授業中に記事を取り上げタブレットで提示し、時事問題を考える。

4月から暮らしはこう変わる(減る年金、増える介護保険料、消費税込みの総額表示、70歳までの雇用機会の確保)

民法改正18歳成年、18歳・19歳厳罰化、多様なライフスタイル、性同一性障害、ダイバーシティ、パートナーシップ制度、パートナー宣誓、プラスチック資源循環促進法、フェアトレード、エシカル消費、企業の社会的責任、パリ協定、児童虐待、消費者契約法 等

- ② 記事の用語を拾いタブレットでGoogle検索をしてまとめる

ジェンダーにかかわる言葉を集めて(Me Too、イコール・ペイ・デイ、アンコンシャスバイアス、ルッキズム・・・)

- ③ 定期試験問題に出題

来秋からスタートする男性産休について

成果：プリントをつくって印刷配布となると、なかなか取り上げられない内容も、プロジェクターでタイムリーに提示することができた。社会にアンテナを張り、自分の生活に結び付けて考えるきっかけとなった。

## **(4) 農業科 (食品製造・2年次食品コース)**

・SDGs 持続可能な開発目標の17の目標を意識しながら、身近な食生活や環境問題に関する課題を整理し、今私たちにできることは何か、今後に向けた提言をまとめ、各自が京都

新聞読者投稿欄「窓欄（若いこだま）」に継続的に投稿する取り組みを行い、身近な生活に興味関心を持ち、過疎高齢化・少子化が急速に進む自らが生きる地域社会の将来への展望を考えた。

成果：京都新聞読者投稿欄「窓欄（若いこだま）」に継続的に投稿し、講座生徒全員が1回以上新聞掲載され、自分の考えを紙面を通し、多くの方々に伝えることができた。中には、多くの反響を呼んだ中身もあり、関連した投稿が続くこともあった。この取り組みによって、生徒自身の自己肯定感が高まった。

自分自身の考えをまとめ、限られた文字数でわかりやすく表現することの難しさを学ぶ良い機会となり、コミュニケーション能力の向上に留まらず、伝わる表現力や文章能力の課題がはっきりと表れる結果となった。

課題：各自の「論理的な思考力」や「伝わる表現力」の育成を学校現場でどのように行っていくかが、今後の課題だと考える。

## **(5) 福祉科（「こころとからだの理解」 障害の理解の領域）**

### 1. 「TOKYO パラリンピックを振り返る」（3年）

「私が紹介するパラアスリート」「パラ競技種目」「記憶に残ったワンシーン」、と見出しの柱を立て、生徒3名が共同で校内の生徒・職員に紹介するパネル新聞製作に取り組んだ。

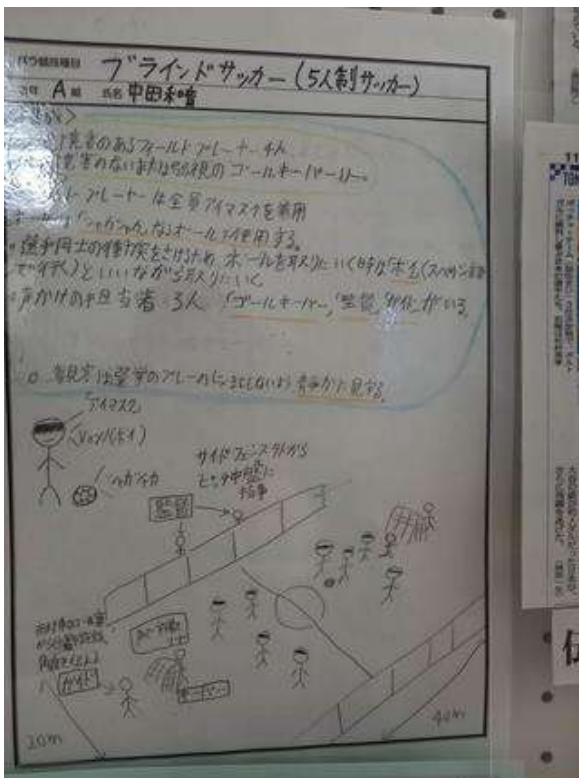
- \*オリンピック開催期間中、パラリンピックの記事をすべて切り抜く
- \*紹介したい関心のある記事をピックアップする。
- \*パラアスリートを生徒1人について3人紹介する。  
その選手の背景、競技に対する思い、印象に残った言葉

### 2. 定期試験問題に出題（2年）

障害者雇用について

成果：生徒個々が、パラリンピック関連の記事に目を通す機会づくりになった。記事の内容から校内で紹介したいことをまとめ、パラリンピックの起源や、パラリンピックを支える人・物・制度に目を向けてネット検索も活用して学びを広げることができた。

「TOKYO パラリンピックを振り返る」参考資料



高等学校 高大連携教育プログラム

## 「学びの深長」のツールとしての新聞②

～多様性と寛容を求めて～

龍谷大学付属平安高等学校 教諭 佐々木じろう

### 1. はじめに

2020年度の実践（龍谷大学政策学部へ内部進学する生徒への入学前課題の一つである「新聞記事作成」）で、生徒が大学から求められた新聞形態の「自由」がうまく表現できないという課題が残った。その原因は、生徒の家庭での新聞定期購読率が50%を下回っている（2021年度政策学部入学予定者は約10%）ことから、新聞そのものの不認知、新聞を読む経験の少ない生徒が多いことと創造力や表現力の課題によるものだと考えている。

本報告は、2020年度実践の反省をふまえ、本校プログレスコース（龍谷大進学コース）3年生文系生徒へ高大連携教育プログラムの一つである「現代を学ぶ」（学校設定科目）における実践報告である。

### 2. 2021年度の「現代を学ぶ」の実践

#### ① 「現代を学ぶ」とは

「現代を学ぶ」（4単位）は、龍谷大学との高大連携科目の一つであり学校設定科目である。対象生徒は、高3プログレスコース（龍谷大学進学コース）文系生徒全員である。開講当初は、新聞記事のスクラップ・要約・意見を毎週課し、言語能力の養成と現代社会の認識を深めてきた。また、年に2度大学の先生の講義を聞く機会を設け、大学の学びを理解する取り組みをしている（現在も継続中）。ここ数年、新聞購読率の低下から、新聞スクラップ課題を外し、授業内で教員側から新聞記事の利用を意識した授業作りを行ってきた。生徒に新聞記事を配布し、その中から課題と解決方法を思考するという形だ。

2019年度より、担当者がそれぞれ「多様性と寛容とSDGs」に関わる課題をテーマとして講座を開講し、生徒が選択する授業を実施し、大学での学び方を前倒しで体験し、より深い思考を求める「探究」的な内容として発展してきた。

#### ② 2021年度の「新聞作成」の実践

「選択別テーマ学習」（約22時間）の中における選択テーマは、「ジェンダー」「チョコレートと貧困」「平和」「中国情勢」「伝染病と歴史」「街づくり」「表現

の自由」の6つだった。各テーマの講座のグループ毎に「新聞作成」とそれに関する「発表」を課題とした。

## (1) 新聞の構成と性格を知る

図1 「新聞を学ぶ」のながれ

- ①逆三角形（見出し・リード文・本文：図2）
- ②5W1H（新聞記事「スエズ運河 100隻通過」（毎日 20210331））利用
- ③童話「桃太郎」を新聞にしよう
- ④5W1Hの確認・見出し作成

図2 逆三角形

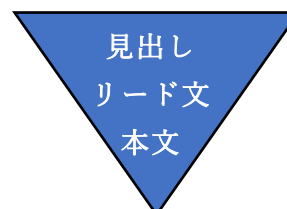


図1・2にあるように、見出し、リード文について深めていく授業を実施した（高知新聞 Plus「新聞作りのテクニック」[高知新聞 \(kochinews.co.jp\)](http://kochinews.co.jp)を参考にプリントを作成)。見出し、リード文の意味をはじめ、構成の重要度に関する逆三角形などで新聞の構成を確認後、童話「桃太郎」についてグループ毎に「見だし」の作成を行った。そして各グループの「見出し」を用紙に書き黒板に掲示し発表した。桃太郎側か鬼側かの立場の違いで、見出し内容が大きく変わることを全員で確認し、新聞記事の性格を再考した（毎日新聞出前授業を参考に作成）。

## (2) 新聞作成の取り組み

授業担当者6人（6クラス）がそれぞれテーマを立て、生徒が個々にテーマを一つ選択し登録して学ぶ形式で学びがスタートした。そして、テーマで学んだことを題材に新聞（A4×1枚）を作成し各講座内で発表した後、その代表が全体へ発表する機会を提供するとともに、優秀な新聞作品を職員室前に掲示し学校全体へ発信した（写真1・2）。



写真1（職員室前の掲示）



写真2（新聞を読む中学生）



### ③ 「新聞作成」の成果

写真3は、職員室前に掲示された1枚である。新聞名は、『多様性新聞』だ。テーマ「ジェンダー」の代表作品の一つである。見出しには「緩和 求める 性別変更要件」とある。「トイレの事情」「性別変更」について日本と外国とを比較し、はるな愛さんや KABA ちゃんという若者も知っている人物の生き方を掲載し、日本における性別変更の課題を発信した。

このように、新聞の構成や内容を意識する授業をしたことで、作品の中身に深まりがでてきたと考えている。

### ④ 「現代を学ぶ」における「新聞作成」の意味

#### (1) 「新聞」をツールとする学びの重要性の認識

これまで「現代を学ぶ」では、クラス内でのポスターセッションや全体でのパワーポイントでの発表に力を置き、新聞記事を扱う時間が限られていた。そして、一定の発表機会を提供することで、人前でも物おじせずプレゼンテーションができ、パワーポイントをツールとして発表する力が年々向上してきたと実感する。

しかし、2020年度からNIE実践指定校に認定され、「新聞」をツールとして何ができるのかを考える機会をいただいたことで、「新聞」をツールとして発信することや「新聞」そのものについて再考する好機となった。今までやってきたパワーポイントでの発表では得られない力を養えることが概ねわかってきたからだ。

#### (2) パワーポイント発信のデメリットを再確認

教育で、情報をどのように他者に伝達するかは重要な課題の一つである。その観点から「現代を学ぶ」においても、その機会を増やしプレゼンテーション能力を育ててきた。しかし、パワーポイントでの発表に、本校特有のデメリットが存在することを今回のNIE教育の実践によって2つ確認できた。

1つ目は、全体へ発信できる人数が制限されることだ。時間の都合上、講堂でクラス(テーマ)代表が発表するという形を取らざるを得ないことから、一部の

写真3

(『多様性新聞』生徒作品)



生徒だけが発信するにすぎない結果となっていた。また、発表できる人数だけでなく発信を受け取る側の人数も制限されていたことに気付くことができた。

2つ目は、授業中に生徒が必要とする情報を得られないことだ。2021年度はまだ生徒がパソコンやスマートフォンのWi-Fiへの接続ができない状態であった。また、Wi-Fiがつながる学校の貸し出しパソコンの数も限られていたことで、授業中のアクティブな活動を支える情報提供ができず、活動が停滞してしまったこともあった。

### (3) デメリットを補う「新聞作成」の実践

「新聞作成」の実践は、発信を受け取る側の拡大の機会となった。職員室前での掲示がそれである(写真1・2参照)。場所さえ確保できれば、学校全体への発信ができることがわかった。これにより、発信を受け取る側の限られた人数が、学校全体へ大きく拡大した。クラスや学年を越えて、高校生だけでなく中学生(平安中学生)にも読み手が広がり、より多くの人に発信できる機会を得た結果となった(写真3参照)。

次に、情報に関する環境整備に関しては、2022年度からは高2～中1までの生徒全員が端末を持ち、Wi-Fiに接続ができるようになることからネット環境の整備が完了した。

一方で、ネット環境に課題があったからこそ「新聞作成」が発展できた良い面があった。授業中に情報を得ることがほとんどできないことから、事前に調べ、その情報の真偽の確認や自己主張の根拠などを議論する時間を持ち、より丁寧な作業を実現したグループがいたことだ。それにより、『多様性新聞』(写真3参照)に見える課題を多面的に捉え、他者に伝えたい内容を「見出し」と比較による伝達の工夫が見られた。

以上のことから、「現代を学ぶ」において、「新聞作成」を課題として導入したことで、教員側が発表の見栄えを重視していたプレゼンテーションであったと認識でき、情報の真偽や根拠などの重要性を再認識できた(図3参照)。

図3

	発表(講堂)	新聞作成
対象者の人数制限	講堂で聴いている者のみが対象	掲示・配布により対象者増加可能
ネット環境整備	Wi-Fi環境・講堂空き具合・要パソコン・情報操作の危惧	情報取得およびその情報の真偽などの思考時間確保

### 3. 「新聞作成」は、学びを深長させたか

#### ①その後の発展へ

龍谷大学総合学園（RSG）加盟高校の代表が集い、「仏教×SDGs」に関連する意見交流会に「ジェンダー」をテーマに選んだ生徒を中心に参加した。その後、大学の先生の紹介で、トランスジェンダーの当事者の方にインタビューを行った。そこから得た課題から、どういう社会を目指したいのかを真剣に考えはじめ、5年後に完成する本校新校舎のトイレについて、「学校という教育現場でこそ、新時代のための教育が行われるべきだ」という生徒の結論から、「男女別ではないトイレ」を学校に提案するとともに、2月に開催した「現代を学ぶ」集会で同世代にトイレの提案の報告とジェンダーフリーへの理解を訴えた。また、今後大学に行っても、後輩へ伝えたいと要望している。

大学生になった彼らが、「現代を学ぶ」の授業の中で高3に、そして中学生に伝えていく機会を作ることを計画しているところだ。

#### ②「新聞記事」作成の意味

先述の通り、学びが深化された一連の「出会う」きっかけ作りの機会の中で「新聞記事」の役割は何だったのかについて考えてみたい。「新聞記事」作成のためには、自分が何を伝えたいのかを認識する必要がある。SDGsに関連するテーマ内での活動においては、その課題を認識し、それに対してすでにアクションを起こしている団体や個人の活動の確認がある。それらに出会うことでさらに次の課題へと続く。『多様性新聞』（写真3）のように、「新聞記事」作成をきっかけに現状認識を理解し深化させる道筋を考え、情報を得ることにつながり発信していくことになる。そして、次の課題発見へと導く可能性があるということだ。

#### ③何に出会わせるかが重要

これまで見てきたように、テーマ学習・「新聞記事」作成・「仏教×SDGs」参加・「現代を学ぶ」集会等、課題や本物と「出会う」機会や発表する機会の獲得によって、より主体的・対話的で深い学びになっていくことにつながるのではないだろうか。

だが、「新聞作成」をすれば、学びが深まるというわけではない。「新聞作成」までの過程で何に出会い、何かに揺さぶられることで、学びが深化し次の課題発見へとつながる。生徒への揺さぶりや意欲継続のための仕掛けにより、学びが継続されることが、『学びの深長』に不可欠であると考え。つまり、教師に

よるきっかけ作りも重要なことである。

#### 4. おわりに～今後の「現代を学ぶ」と「新聞作成」～

2022年度の高1から順次新カリキュラムの「総合探究」が導入される。それと並行して、「現代を学ぶ」は現状の高3「4単位」から、高2と高3各「2単位」実施へと移行される（図4参照）。今後、NIE実践指定校としての2年間の実践の土台に、「総合的な探究の時間」（「総合探究」）と「現代を学ぶ」をうまく連携し、「新聞記事」作成を取り入れることで、理解と課題を明確に表面化させ、何を発信するかを深く追求する実践へとさらに進化させたい。

図4 新カリキュラムにおける「現代を学ぶ」の変化と「総合探究」

	高2		高3	
	2021年度	—	—	現代を学ぶ (4単位)
2022年度	現代を学ぶ (2単位)	総合探究 (1単位)	現代を学ぶ (4単位)	—
2023年度	現代を学ぶ (2単位)	総合探究 (1単位)	現代を学ぶ (2単位)	総合探究 (1単位)



年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校＞
1994	2	聖母学院小学校、京都府立商業高等学校（現すばる高等学校）
1995	3	聖母学院小学校、京都市立修学院中学校、同志社高等学校
1996	3	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校、立命館宇治高等学校
1997	3	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校、立命館宇治高等学校
1998	2	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校
1999	3	京都市立養正小学校、京都市立吉祥院小学校、京都文教女子高等学校
2000	3	京都市立養正小学校、京都市立吉祥院小学校、京都文教女子高等学校
2001	6	京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 京都市立花山中学校、八木町立八木中学校、京都文教女子中学校
2002	9	京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 京都市立衣笠中学校、京都市立伏見中学校、八木町立八木中学校 京都文教女子中学校、京都府立北稜高等学校、花園中学高等学校
2003	10	京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、亀岡市立曾我部小学校 八幡市立美濃山小学校、京都市立衣笠中学校、京都市立伏見中学校 向日市立勝山中学校、京都府立北稜高等学校、花園中学高等学校 華頂女子中学高等学校
	4	(準)京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 八木町立八木中学校
2004	10	京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、聖母学院小学校 亀岡市立曾我部小学校、八幡市立美濃山小学校、京都市立洛北中学校 京都市立洛南中学校、向日市立勝山中学校、長岡京市立長岡第三中学校 華頂女子中学高等学校
	6	(準)京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、京都市立伏見中学校 八木町立八木中学校、花園中学高等学校、京都府立北稜高等学校
2005	9	京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、聖母学院小学校 京都市立洛南中学校、京都市立洛北中学校、京都市立蜂ヶ岡中学校 長岡京市立長岡第三中学校、京都教育大学附属桃山中学校 京都市立塔南高等学校
	8	(準)京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、八幡市立美濃山小学校 京都市立伏見中学校、向日市立勝山中学校、京都府立北稜高等学校 花園中学高等学校、華頂女子中学高等学校
2006	10	京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、京都市立鏡山小学校 城陽市立寺田西小学校、京都市立蜂ヶ岡中学校、京都市立旭丘中学校 京都教育大学附属桃山中学校、亀岡市立育親中学校 京都市立塔南高等学校、京都市立洛陽工業高等学校
	7	(準)京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、八幡市立美濃山小学校 京都市立洛北中学校、京都市立洛南中学校、長岡京市立長岡第三中学校 華頂女子中学高等学校
2007	11	京都市立鏡山小学校、京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校 城陽市立寺田西小学校、向日市立第5向陽小学校、京都市立旭丘中学校 京都市立久世中学校、京都市立西京高等学校附属中学校、同志社中学校 京都府立園部高等学校、京都学園高等学校
	7	(準)京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、京都市立洛北中学校 京都市立蜂ヶ岡中学校、京都教育大学附属桃山中学校 京都市立洛南中学校、長岡京市立長岡第三中学校

年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校＞
2008	10	京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校、京都市立吉祥院小学校 向日市立第5向陽小学校、京都市立久世中学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都市立下鴨中学校、城陽市立西城陽中学校 京都府立園部高等学校、京都学園高等学校
	2	(奨励校) 立命館小学校、京都市立周山中学校
	5	(準) 京都市立紫竹小学校、京都市立鏡山小学校、京都市立蜂ヶ岡中学校 京都市立旭丘中学校、京都教育大学附属桃山中学校
2009	10	京都市立吉祥院小学校、京都市立安井小学校、京都市立一橋小学校 京都市立二条中学校、京都市立下鴨中学校、京都市立桂中学校 城陽市立西城陽中学校、綾部市立上林中学校、宮津市立養老中学校 京都府立鴨沂高等学校
	6	(準) 京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校、向日市立第5向陽小学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都府立園部高等学校 京都学園高等学校
2010	10	京都市立月輪小学校、京都市立安井小学校、京都市立一橋小学校 福知山市立大正小学校、京都市立北野中学校、京都市立二条中学校 京都市立桂中学校、宮津市立養老中学校 京都府立鴨沂高等学校、東山中学高等学校
	7	(準) 京都市立吉祥院小学校、京都市立松尾小学校、京都市立静原小学校 向日市立第5向陽小学校、京都市立下鴨中学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都学園高等学校
2011	10	京都市立月輪小学校、京都市立竹の里小学校、京都市立葵小学校 福知山市立大正小学校、京都市立北野中学校、京都市立向島中学校 八幡市立男山第三中学校、京都教育大学附属京都小中学校、東山中学高等学校 京都府立東稜高等学校
	5	(準) 京都市立吉祥院小学校、京都市立一橋小学校、京都市立下鴨中学校 宮津市立養老中学校、京都府立鴨沂高等学校
2012	10	京都市立藤ノ森小学校、京都市立竹の里小学校、京都市立葵小学校 京都市立西陵中学校、木津川市立木津南中学校、京都市立向島中学校 八幡市立男山第三中学校、京都教育大学附属京都小中学校、 京都光華中学・高等学校、京都府立東稜高等学校
	5	(準) 京都市立月輪小学校、京都市立一橋小学校、宮津市立養老中学校 東山中学高等学校、京都府立鴨沂高等学校
2013	10	京都市立藤ノ森小学校、京都市立朱雀第六小学校、京都市立藤城小学校 木津川市立恭仁小学校、京都市立西陵中学校、木津川市立木津南中学校 京都市立西京極中学校、長岡京市立長岡中学校、京都府立向陽高等学校 京都光華中学・高等学校
	2	(準) 京都市立竹の里小学校、八幡市立男山第三中学校
	1	(トライアル校) 宇治市立笠取第二小学校
2014	10	京都市立朱雀第六小学校、京都市立藤城小学校、京都市立明德小学校 木津川市立恭仁小学校、京都市立双ヶ丘中学校、京都市立西京極中学校 長岡京市立長岡中学校、八幡市立男山東中学校、平安女学院中学校高等学校 京都府立向陽高等学校
	5	(準) 京都市立竹の里小学校、八幡市立男山第三中学校、京都市立藤ノ森小学校 木津川市立木津南中学校、京都光華中学・高等学校

年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校＞
2015	10	京都市立明德小学校、京都市立高倉小学校、京都市立衣笠小学校 京都市立双ヶ丘中学校、京都市立伏見中学校、八幡市立男山東中学校 京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校、京都府立東舞鶴高等学校 平安女学院中学校高等学校
	3	(準) 京都市立西京極中学校、長岡京市立長岡中学校、京都光華中学・高等学校
2016	10	京都市立高倉小学校、京都市立衣笠小学校、京都市立宇多野小学校 京丹波町立瑞穂小学校、京都市立伏見中学校、京都市立大枝中学校 京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校、京都女子中学校高等学校 京都府立東舞鶴高等学校
	2	(準) 八幡市立男山東中学校、平安女学院中学校高等学校
2017	11	京都市立宇多野小学校、京都市立山階南小学校、京田辺市立松井ヶ丘小学校 京丹波町立瑞穂小学校、京都市立京都御池中学校、京都市立大枝中学校 木津川市立木津第二中学校、亀岡市立亀岡中学校、綾部市立上林中学校 京都女子中学校高等学校、京都府立久御山高等学校
	3	(準) 京都市立高倉小学校、京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校
2018	11	京都市立竹の里小学校、京都市立山階南小学校、京田辺市立松井ヶ丘小学校 京都市立京都御池中学校、京都市立深草中学校、木津川市立木津第二中学校 亀岡市立亀岡中学校、綾部市立上林中学校、南丹市立八木中学校 ノートルダム女学院中学高等学校、京都府立久御山高等学校
	0	
2019	9	京都市立新町小学校、京都市立竹の里小学校、宇治市立大久保小学校 伊根町立本庄小学校、京都市立下鴨中学校、京都市立深草中学校 南丹市立八木中学校、ノートルダム女学院中学高等学校 京都府立須知高等学校
	2	(準) 京都市立京都御池中学校、綾部市立上林中学校
2020	8	京都市立新町小学校、京都市立竹の里小学校、宇治市立大久保小学校 伊根町立本庄小学校、京都市立下鴨中学校、京都市立大淀中学校 龍谷大学付属平安高等学校、京都府立須知高等学校
	1	(準) 綾部市立上林中学校
2021	9	京都市立竹の里小学校、京都市立羽東師小学校、京田辺市立草内小学校 京都市立大淀中学校、京都市立花山中学校、八幡市立男山東中学校 宮津市立栗田中学校、京都府立久美浜高等学校・丹後緑風高等学校久美浜学舎 龍谷大学付属平安高等学校

**2021(令和3)年度 京都府NIE実践報告書**

2022年8月発行

編集 京都府NIE推進協議会事務局

〒604-8577 京都市中京区烏丸通夷川上ル

京都新聞社内

TEL:075-241-5231

Email: [nie@mb.kyoto-np.co.jp](mailto:nie@mb.kyoto-np.co.jp)